

# 世界の子供と家族

## 講演

講師：湯沢 雍彦 氏

2007年7月19日

### 〈抄録〉

司会： 生活史研究会を拡大して、このようなかたちで講演会と致しまして、湯沢雍彦先生をお迎えいたしました。湯沢先生のご紹介は後ほど私がさせていただきますが、まず、私どもの大学の学長である鮎戸先生にご挨拶をいただきたいと思ひます。鮎戸先生、よろしくお願ひいたします。

鮎戸 皆さん、こんにちは。今お話のありました現代史研究所で、今年は4回の講演会を計画していただひています。その第1回の講演会が今日です。テーマは「世界の子どもと家庭」ということですが、皆さんの場合、特に去年から保育子ども研究所もできて、幼年・幼稚園教育や保育に関心のある学生さんもおたくさんいらっしゃると思ひます。特に今日は湯沢先生がご自身で撮られた写真もおたくさん見せていただけるようですし、最後には抽選でプレゼントまでつひている盛り沢山の講演会です。どうぞ楽しみに聞いていただきたいと思ひます。それでは、後ほど。よろしくお願ひいたします。

司会 鮎戸先生、ありがとうございます。それでは皆様、私は現代史研究所の監事の長谷川と申しますが、私から湯沢先生の簡単なご紹介を申し上げたいと思ひます。今ここに東洋英和の学生の方がおたくさんいらっしゃいますが、湯沢先生は本学で教鞭をとられた元教授でもいらっしゃいます。お手元にこのような講演会のご紹介パンフレットがございますが、湯沢先生は東京家庭裁判所の調査官をなさいます、その後お茶の水女子大学で教鞭を取られ、ご退官後は東洋英和女学院大学にお出でいただき、お茶の水女子大学の名誉教授として今も活動されています。

ご専門は法社会学で、その見地から、家族の問題、子どもを様々にご研究されています。私は研究会で毎年ご一緒させていただくのですけれども、大変アカデミックな、研究肌のデータをきちんと扱う先生でいらっしゃいます。また、実は非常にカメラの腕がすごくて、後ほどこちらのプレゼントがございます。このような写真集になっているのですけれども、今日はこの中の写真を使いながら世界各国の子どもと家族の事情をお話いただくことになっております。ためになるお話だと思ひますので、ぜひ楽しんで聞いてください。では、湯沢先生、よろしくお願ひいたします。

湯沢 湯沢です。今日はこのような大きい会をつくっていただきまして、ありがとうございます。

私はこの東洋英和に専任でいたのは2年間だけだったのですが、その前後、非常勤でおりましたので、合わせると6年間ぐらいお世話になっています。

さて、私は家庭裁判所からお茶の水女子大学に呼ばれました。新しい学科と講座が新設されたのです。それが日本でただ一つ、家族関係学を専門に研究する講座で、そこにずっといたものですから、家族関係について、普通の論文や調査以外のことについても調べなければいけないのではないかと思ひました。飢えに瀕した家族とか、戦争に巻き込まれて負傷したかわいそうな子どもたちの写真は多く新聞や雑誌に載るのですが、ごく普通の普段着の表情、素顔の表情も集めることも必要ではないかと私は思っただけです。

そこで30年間以上にわたりまして、海外出張や、観光旅行にもよく行く機会がありました。25以上の国を回ったと思ひますが、そのうち15ほどの国の場面につきましては、他の人にもご紹介でき

るようなバックアップの資料もあるので、それをまとめて、『街角の家族たち』という自分のために自分で作った写真集なのですけれども、この本の第1部にあるものをご紹介していきますながら、他の国——主にヨーロッパ、中国、韓国、アメリカですけれども——その普段着の表情を知っていただきたいと思えます。

それでは、時間が約1時間しかありませんので、早速内容に入らせていただきます。

最初（の写真）は、フィンランドのタピオラという町へ行った時のものです。非常に意欲的に新しいまちづくりを50年前からつまり第二次大戦直後から——始めたわけですが、その中央の広場におもしろい形の銅像が建っておりました。本当はしかめ面しい名前がついているのですが、俗には「親子断絶防止の銅像」だとわかりました。それはなぜかと言いますと、この形の中に子どもが入って立ちますと、母親の胸に抱かれたような感じをフィンランドの人は持つのだそうです。フィンランドだけではありませんけれども、北欧の子どもたちは一般に早熟です。13歳を過ぎますと、もう親の言うことはあまり聞かないで自分一人の判断で行動することが多くなります。それはある面では良いけれど、ある面では親にとっては寂しいことなので、13を過ぎてからも親子が付き合いを続けてほしい、そういう願いを込められて作られた銅像だとわかりました。これは、たまたま私どもがおりましたときに、遊びに来ていた子どもたちが入ったところをキャッチしたものです。

この写真はスウェーデンのノルディスカという北方民族博物館——北欧諸国には多いのですが——を見ておりましたら、ある部屋に母と子どもたちが来まして、なにやら着替えていたのです。どうしたのかと思いましたが、部屋に備え付けで100年以上前の履物や子ども向けの衣服が用意してあるのです。道具も用意してあるわけです。現在スウェーデンは工業国家ですけれども、100年以上昔は農業国だったのです。そういう頃にはこのような物を着て、こういうことをしていたと、実地に即して親が説明したほうが子どもも納得できるというわけです。確かに私も話を聞きまして、日本の博物館もただ見せるだけでなく、このような実際のものを用意しておいて、100年前の姿になってみて話を聞くほうが納得いくだろうと感心したので、写真に撮っておいたのです。

これから後しばらくデンマークのことをご紹介いたします。

デンマークのことにつきましては、私がここにおりました7～8年前、こちらの教授会のご厄介になりました。そのとき、ある教授会に出ましたら、「この中で共同研究をやる希望者がいませんか？ それには研究費をつけますよ」と言ってくださったのです。私は新米だったのですが、手を挙げましたら、他の方が手を挙げないので当たってしまったので、こちらの二人の先生——統計学の林先生と生活学の川崎先生——を誘いまして、2年間にわたって調べることを始めました。その部分はあとでご紹介しますが、朝日選書の『少子化をのりこえたデンマーク』という本にまとめたものです。デンマークでは一時出生率が1.3まで下がったのですけれども、今は2近くに上がっております。その秘密は何かを確かめに行ったのですけれども、その一つの姿がこの本です。われわれは6人で行きましたが、ホテルに泊まったのでは様子がわからないので、2人ずつ、子どもを持っている家で部屋がある人に貸してもらいました。現地には約200人の日本女性がデンマーク人と結婚していますから、そういう伝手を頼りますと貸してくれる家が見つかって、その家の一軒がここだったわけです。

これはこの子たちの父親ですが、育児休暇を取っていました。父親が取っているのです。デンマークでは出産後2週間、母親も父親も必ず休まなければいけないのです。強制的に働くことが禁止です。その後6ヶ月間は一人ならどっちが取ってもよいということで、一番目の子どものときには母親が取ったそうです。二番目の子が生まれて、今度は父親が取り、あと1週間か1ヶ月でその休暇が終わるときでした。そうすると、二人とも勤めに出て共働きが復活するのですが、終わる寸前にこのお父さんが二人の子どもを昼間面倒見ている家にたまたまホームステイできました。

その子どもたちがもう少し大きくなって入る所です。近所に統合保育園があります。「統合」というのは数ヶ月から5つぐらいの大きい子まで年齢差別なく受け入れるということで、「統合」という字を入れた近所の保育園があるわけです。そこへ行きました。朝9時頃だったと思うのですが、家で食べる余裕がない子どものために保育園の先生が作ってくれまして、朝の食事を与えている最中でした。

1枚前にありました、あのお父さんです。偶然わかったのですけれど、子どもを預けている保育園の父母会長もやっていました。それで、今度の金曜日の夕方に父母会主催の遠足があるとのことでした。「2人ぐらいだったら連れて行ってあげてもいいよ」と言われるので、私どもはそれについて行きました。これはその遠足の情景です。その遠足も、またいろいろ日本と比べて傑作です。金曜日の夕方の遠足なのです。午後5時、保育園——保育園と言ったり、幼稚園と言ったり、その言い方は統合もあってまちまちですが——をスタートするのです。それには父母が全員参加です。どうして父母が全員参加できるのでしょうか。金曜日はどんな企業も3時半で終業なのです。もちろん、放送局や大使館など特殊な企業は別ですが、それ以外の普通の職業は、普通の日には午後4時終業です。これが一大特色です。朝は8時から必ず始めて、昼休みは30分です。1週間37時間制ですから、金曜日まで午後4時までやると、37時間をオーバーしてしまいます。それで金曜日は午後3時半終業なのです。

3時半で家に帰れますので、その途中子どもを引き取ります。父母二人とも参加するのが当たり前なので、家に小さい子を残しておけません。半分ぐらいの父兄は、まだ小さい乳幼児がいるので乳母車を押しながらの遠足になります。途中バスにも電車にも乗りません。私どももついていって、「なんて長く歩くのだろう」と思いましたら、結局40分も歩きました。「遠足とは遠く歩くものだ。日本語だってそう書くじゃないか」と思い出しました。日本の幼稚園遠足はすぐ車に乗ります。どちらが遠足に近いのか、わかりました。

40分で着いたところがここです。門も扉もありません。だから、初めは何かわからなかったのですが、後で聞きましたら、「子どもの森公園」というところでした。そこへ着きましたら、こういう木に模様をつけたものはありますが、ブランコも滑り台も、そういう遊具はいっさいないのです。もちろん、お金を使って動くものは一つもありません。デンマーク全体で、自動販売機などというものは全然ないわけです。ここにもそういうものはいっさいありませんでした。

できるのは森の中の草原を駆け回るだけです。5つ6つの子は、それだけで十分おもしろがります。親は離れて座って、大人ばかりでおしゃべりしてしまっていて、いっさい注意を与えません。「そこへ行ったら危ないじゃないか」とか、「それはやめたほうがいい」とか、いっさい言わないのです。勝手に遊んでいました。途中で一人、男の子の泣き声が聞こえました。どうしたのかと思ったら、倒れた木から飛び降りるときに失敗して、足を少しくじいたらしいのです。大きな女の子二人が近寄って助けようとしたのですが、泣き声をやみませんでした。仕方がなくて母親を呼びに来ました。母親はそれからやっと出て行くといったようなことも見聞できました。こういう野外の公園へ年に2回行くそうです。これは9月の初めでした。ご承知の通り、北欧は白夜に近い所です。だいたい10時半ぐらいまで明るいのですから、午後5時スタート8時半解散という遠足が成り立つわけで、家族全員参加の遠足を見ました。

この写真もオーデンセというアンデルセンが生まれ育った町の小学校です。初めわれわれが校長の話を聞いていたところ、午前10時になりました。そうしたら振鈴が鳴りまして、「これから全員の休憩時間です。ちょっと待ってください」と校長先生が言われ、いわば校舎の中庭にあたる所に出ました。そして、低学年生はこれから合唱だと言うのです。歌詞がわからない子どもは歌の本を取りに行きます。先生が立って、「自由な姿で歌っていいよ」と言います。自由な姿というのは、結局あぐらをかくことになります。そして、のんびりとした合唱が始まりました。生徒はみんな座っています。上から上級生たちが見物しているのですが、低学年生は座っています。そのような、立っているのは先生だけという合唱がのんびりと始まった光景を見ました。

低学年生は午前だけで授業が終わります。お昼はどうも自分の教室で日本の小学生みたいにお行儀よく食べてはいないようです。バラバラです。私が見た限り勝手放題でした。廊下で食べている子もいましたし、庭へ出ている子もいました。それから、家庭科(教室)の中に入っている子もいました。調味料をかけるらしいのです。好きなどころで好きなものを食べていいわけです。食べている中身は、多くの場合はパンに何かをはさんだサンドイッチが多いのですけれども、極端な例を言いますとパン一個、うんと極端な例を言いますと野菜一つ、人参一本なんていう子もいたようです。そういうことについて本人たちは全く気にしませんし、まわりの子も何も言うことはありません。そういうことに対して他人は何とも思わないのです。

振り返ってみますと、日本の幼稚園のお弁当はなんと豪勢で、贅沢にお金をかけたご馳走が並ぶのでしょうか。私は、女性の方誰かに世界の幼稚園や小学校を回って、給食状況の調査研究をしてもらいたいと思います。日本のお弁当にけるあの母親のエネルギーやお金や関心は、世界的に珍しいのではないかと思います。

さて、お昼が済んだ後ですが、この子たちはすぐ家には帰れません。9歳までの子は、親と一緒になければ帰ってはいけません。親はお昼過ぎにはいませんから、学童保育室に移ります。大きな校舎の隅っこが学童保育室でした。そのうちの1枚です。庭へ出て…これはおわかりだと思いますが、たき火の上でクレープを焼いています。クレープを焼いて食べることで時間をつぶしているわけです。ここに立ち会っている人は学校の先生ではありません。デンマーク語で「ペタゴ」と呼ばれる職業の人で、生活指導員です。一定の訓練を受け資格を持った人になります。このように子どもの世話をする仕事がたくさん用意されていて、それで女性の就労率も高くなるのです。デンマークの30歳女性の就労率は93%です。特別な例外として、非常に病気がちの人や、子どもが4~5人もできた人を除いて働いているのが普通ですが、「ペタゴ」のような職種が多いので就労率も高くなっているわけです。

ちょうど午後3時頃だったと思います。お迎えの早い父親が小学校の学童保育室に来ました。そのお父さんの子どもなのでしょう、姉妹は喜んでいました。この写真は私と一緒にいた一人の人が撮ったのです。私はちょうどこのとき、この裏側にいました。父親が早速迎えに来た大事な場面だと思って、後から写真を撮ろうとしたのです。そうしましたら、このお父さんは後から見るとつるつるに禿げていまして、日本人が見るとおじいさんが迎えに来た印象を与えますが、そうではないわけです。僕は慌てて、こちら側にいた人に「代わりに写真を撮ってください」と頼んで撮れた写真です。正面から見ると、明らかにまだ30代の父親です。この二人の子を迎えに来たわけです。「今日は私のほうが早く帰れたから、私が迎えに来たのだ」ということです。ほとんど自動車で迎えに来ますから、その自動車のところまで二人の子を連れていくのですが、大きな体格のいい父親の両腕に女の子たちが一本ずつ、ぶら下がりがりながら行きました。親子の縁が非常に深いことを感じさせる情景でした。

それから30~40分経ったときに、さっきのクレープ焼きの場所の隣にこのお母さんが迎えに来ました。もちろん別の子です。お母さんはここに用意してありますノートに子どもにチェックさせました。名前ところにチェックを入れて、「私は母親が来たので一緒に帰ります」と書き入れて帰って行きました。これは早めなのです。午後4時まで一般の企業はまだ働いていますから、その前に来るのは、早帰りの人か、やや変わった職種の人です。

小学校の見学が済んだので私たちは別のところに行こうと帰る途中です。道路で信号待ちをしていました。そうしましたら、私が立っているすぐ脇の道路に、この車がやってきました。自転車は珍しくありませんけれども、後に珍しいものをつけているなど思いました。午後4時過ぎに仕事が済んだ男性が、自分の子とおそらく近所の頼まれた子をこのようなカゴに入れて乗せて家に帰る途中です。この子たちを迎えに来た父親だと一見してよくわかる情景でした。子どもたちも父親もニコッとして

くれました。確かに日本にはこの車はほとんどありません。日本ですと前か後に乗せます。でも、それは危険性が大きいので、このほうが安全だろうと思いました。

これは別の町の普通高等学校へ行った時の写真です。数学と英語の授業を見た後で、校長先生に生徒とも話してみたいと頼みましたら、7人の男の子と女の子を集めてくれました。高校3年で日本より1つ上ですが、17～18歳だと思います。まず、後から見てびっくりすることは、誰も指示しなかったのですが、男の子、女の子、男の子、女の子、男と座るのです。日本でこういうことをしたら、おそらく男の子は男の子ばかり、女の子は女の子ばかりで固まるのではないのでしょうか。ごく自然に男女交互に座ったほうがいいと思っているのか、自然にこうなることにまずびっくりいたしました。

それから、「あなた方は恋人いるの?」とか、「その人と結婚しようと思っているの?」とか、「どういう仕事に就きたいの?」と聞いてみました。われわれが話す程度の英会話は、この高校3年生は十分できるのです。早い人は小学校から英語教育をやっています。英語を知らないと生きていけないところが多いせいか、しっかり身につけています。ですから、皆さんもデンマークは——スウェーデンもそうだと思いますが——英会話が少しできるとしたら、それで十分です。われわれの仲間はデンマーク語は一言もわからなかったのです。けれども、いろいろな調査ができたのは英語のおかげでした。

これはウクライナです。社会主義をやめる前のソビエト連邦の一部だったウクライナで老人問題関係の学会がありまして、行ったついでに撮りました。無名共同墓地へ行きましたら、可愛い女の子が一人でヨチヨチしていて、この子の写真を撮りたいと思って、カメラを向けたのです。そうしたら、おばあさんが大急ぎでやってまいりました。心配というわけです。とても可愛くてしょうがないという表情が隠しきれないおばあさんでした。無名墓地の墓参りに来た一団の人たちだったと思います。

これはウクライナの首府キエフへ行ったときのものです。学会の「エクスカーション」として、いろいろなところへ案内してくれました。「結婚式を見たいか?」と言われて、私は真っ先に手を挙げ、連れて行ってもらいました。キエフには11ほどのきれいな結婚式場がありました。当時、社会主義全盛の時代で、普通のホテル結婚式はないのです。教会は社会主義をやめるまでソ連邦が否定していました。だから、教会で結婚式もできないというので国が公営の結婚式場を設けました。やはりきれいなところほど人気があるのだそうです。これは一番きれいだったところらしいです。この人が所長さんです。結婚の登録館です。女の人が所長さんで、長々と訓辞いたしました。結局、社会主義的な結婚、社会主義的ないい家族をつくれということだったようです。それが済んだ後、このテーブルの前に出まして、ここで本人がサインをいたします。サインを確認しますと、所長さんが「これであなた方は立派に結婚できた。これで結婚式は終わり」と言いましたら、途端にこの二人は喜んで抱き合いました。それだけではなくて、周りに待ちかまえていた親類縁者——12～13名でしたけれども——その人たちもあわせて、この二人にキスの雨を降らしました。これはすべて無料です。隣の部屋にチョコレートが山積みしてありまして…アルコールは多分なかったと思うのですが、そのくらい簡素な式でした。あとは、お金に余裕がある人は車を連ねてちょっとした名所へ行ったり、レストランを借り切ったりして宴会をやる組もあるそうです。

式が済んだ後で、「この衣服はどのくらいするのでしょうか?」と、私は通訳を通して聞きました。そうしたら、「どうして(そのような事を聞くのか)?」と言うわけです。「日本の新郎新婦はだいたい貸衣装で済みますのです」と言いましたら、「われわれは自前で、自分たちで作ります」と言っていました。「日本の人はお金がなくて作れないのですか。かわいそうですね」と言われた事を思い出しました。実は反対なのです。日本のほうがずっとお金がある時代の話です。

ウクライナはやはり教会を公認しませんでした。今ではものすごくロシア正教が盛んです。私は今年の5月にまたロシアへ行きまして確認したのですが、結婚宮殿であるように行なう結婚式は健在です。ただ、今はホテルや教会へ行ってもいいのだそうです。

それから、生まれた赤ちゃんの命名を行なう宮殿が別にあります。英語ではベビーズパレスと言っていました、あるのです。そこでもやはり所長さんは女性でした。共通している点は、貫禄があって太ってはいくれない事です。だいたい80キロぐらいないと所長さんは務まらないのではないかと思うくらい貫禄がある人です。さて、その人もやはり長い訓辞をいたしました。立派な社会主義的な人間を育てよという内容だったようです。

10分ぐらいの訓辞が済みますと…両親はこの夫婦です。父親に向かいまして、「この子の名前を何とつけるのですか？」と聞いたようです。そうしましたら、父親は大きな声で胸を張って、「アンドレ」と言ったのです。「アンドレ」っておわかりでしょうか。有名なトルストイの『戦争と平和』の主人公です。ロシアの人はもちろん、日本の人でもトルストイを読んだことがある人には忘れられない名前です。周りの人も「アンドレ、いい名前だ」と納得したように頷いていました。夫婦の両脇にいるのは証人になる夫婦です。

これはイギリスのストラッドフォード・アポン・エイボンという、シェークスピアの町へ行ったときの写真です。通路と池があります。イギリスの南部では非常に小さい運河が発達して、夏休みになりますと、家族ごとに小さなボートを借りて、それに泊まって、1週間か10日ぐらい、ボートのツアーをするのが流行っていました。今でも残っていると思います。水位が違いますので、このような大きな池へ入るときには水門を開けなければいけません。それでその時間まで待っているわけです。時間が来ますと、近所から親子・兄弟がやってきて…実はこれ間違えたのですが、私が初めて撮ったときには、小さい10歳ぐらいの坊やが力いっぱいこれを引いていました。それで父親のほうでこれを回します。これはどうももっと年上の兄弟のようですが、そういうことをして、この番をしている家族が一生懸命、その役割をしていたわけです。見物に来た観光客は「これはおもしろい」と、すずなりになってその様子を見ています。

イギリスには真ん中辺りに湖水地方があるのをご存じだと思います。その中の一番中心はウインダムミアという湖です。そこが一番中心なので、私ども夫婦はその観光船に乗っていたのです。そうしたら、小学生の連中と乗り合わせました。これは船の中です。子どもにとって名勝というのはあまりおもしろくないらしく、非常に退屈していたのです。そこで、私の家内はいつも折り紙を持っていて、これは馬なのですけれども、馬の折り紙を作ったのです。ただの馬ではおもしろくないのですが、尻尾を持ってくると持ち上げますと、一回転して、うまく回しますと、また同じスタイルで立つのです。こういうのを英語では「アクロバットホース」と言うのだそうですが、それを作ってやったわけです。この子たちは初めてなのでうまくいかなかったのですが、何回かやるうちにうまく成功いたしました。そうしましたら、途端に大喜びしまして、みんな大騒ぎで喜びだした場面です。私がこれを写真でキャッチできたのは、二回目か三回目の時でした。

これは、ヨークというイギリスの真ん中辺の昔の大都市です。われわれが食事をしていましたら、隣の大きな部屋で明らかにある団体が、何やら式らしいことをやっていたわけです。プレゼント等を見ましたところ、結婚式だと気がつきました。普通だったら、終わったところで帰っていいわけです。ところが、この人たちは家へ帰らないで中庭へ出て、結婚衣装のままでミニゴルフ等をやって遊んでいるわけです。「おかしいな、そんなことをしていいのかな、きれいな衣服が汚れてしまうのでは…」と私どもは思いました。「どうして（ミニゴルフを）やっているのですか？」と聞きますと、「夕方、別のグループを呼んで二次会をやるのです。それまでの間退屈なので、暇つぶしにみんなとミニゴルフをやっているのです」というわけです。ここには写っていませんけれども、このような姿で寝ころ

んでいる人もたくさんいました。「そんなことをすると、きれいなスーツやドレスが泥で汚れるじゃないですか」と言ったら、何て言ったと思いますか？「これは貸衣装だから汚くなくてもいいんです。自分のものじゃないですから」という返事が返ってきました。そのような考え方もわれわれとは逆です。そういうところがイギリス人の面白さです。

ソウルズベリーという大寺院がロンドンの西のほうにあります。カンタベリーと並ぶ、双壁の大寺院です。そこを見学し終わった私どもが急いで出口へ行こうと思ったら、通りがけにこのオヤジさんたちが並んで、あくびをしているのが目に映ったのです。しかも、その人たちの側には乳母車があります。これはちょっとおもしろいと思ったわけです。聞いてみますと、奥さんたちを先にお寺の見物に行かされたそうです。この人たちは赤ちゃんを預かって待っているのですが、なかなか連れ合いが帰ってきてくれない。それで待ちくたびれて、あくびがとまらない様子だったわけです。ちょっと失礼かなと思ったのですが、この場面は急いで撮りました。これはブレています。私が歩きながら無理して撮ったのでブレてしまったのです。

ことに夏になりますと、今みたいに父親がこのような乳母車の世話をしている様子は、ヨーロッパ各国でたくさん見られます。

イギリスの西のほうにフィッシュガードという小さい町があります。そこからロンドンのほうへ行く列車が出ます。われわれはそこに行こうと思って待っていました。しかし、定刻を過ぎても列車がさっぱりやって来ないわけです。われわれも退屈だったのですが、この坊やもしびれを切らして、ちょこちょこ、ちょこちょこするようになりました。私どもは、この坊やの姿が楽しそうなのでキャッチしようと思ったのです。そうしたら、私のカメラに気がつきました。この坊やは急いで隠れようと思ったのですが、隠れるところがないので、おばあさんのブラウスの後に隠れようといやしました。そうすると、このおばあさんはそうされちゃかなわないので、大きな悲鳴を上げたのです。結局、私どもがこの坊やの姿をキャッチしたいのだとわかって、このお母さんも、おばあさんも、「カメラのほうを向いてあげて」とサインをしてくれました。それで、この坊やは一瞬だけわれわれのほうを見てくれたという情景です。三代での旅行はよく見られることです。

これはアイルランドです。やはりイギリス本国と並んでパブ（酒場）が多いところですが、酒場と言えば若い男の乱暴な飲み方という評判が強いのですが、実はこのような喫茶店風のパブもアイルランドにはあるのです。飾りつけも非常にアイリッシュ風に落ち着いた飾りつけで、親子や夫婦連れがパブでのんびりしている情景に出会うことができました。

これはドイツです。カウフホフ（Kaufhof）というドイツ一番の——日本だったら三越か高島屋かくらい——デパートがミュンヘンにあります。そこへ、クリスマスのにぎやまに行きました。クリスマスの飾りつけは南ドイツが盛んで、おそらくヨーロッパでも一番豊かだと思えるのですが、その中での圧巻の一つは、このデパートの一階のショーウインドーでした。ここから始まりまして、ずっと15メートルか20メートルぐらい並ぶのですが、中は人形——ことにぬいぐるみで作りました大人形——それもほとんどグリム童話にちなんだ動物ばかりを並べているわけです。お母さんと子どもは吸い付くように見ていました。

そのショーウインドーを何枚も撮ったので、少しだけ紹介しておきます。これはわかりますでしょうか？赤ずきんちゃんの場面なのですね。赤ずきんちゃんの相手をしている動物はおおかみ。このような調子で並ぶわけです。

この子自身がまるで赤ずきんちゃんのようになっています。この子はガラス戸のこちらで見ているわけで、中身のほうがグリム童話にちなんだ物語——みそさざいと熊というお話——です。このような調子で子どもたちがしがみついているショーウィンドーです。

これはドイツの首都ベルリンです。森鷗外で有名なマリア教会の近くに、海の神様ネプチューンの大きな立派な銅像があります。私がそれに見惚れておりましたら、遠くからこの女の子がやってきて、この子たちはこれを見るのではなく、乗っかって遊んでしまうのです。こういうことに対してまったく平気です。だから、「入ってはいけません」「乗ってはいけません」等という掲示は一切ないのです。平気でこれに乗って遊んでいました。私は家内が作りました動物人形絵葉書を持っていたものですから、そのうちの二人の子にあげたのです。まったく初対面ですから、私など見知らぬおじさんです。それなのに、非常にうれしがってニコニコと笑い出した場面を撮りました。私から言わせるとこれは一種のエサなのですけれども、それで子どもたちは喜んで笑ってくれたので、このような場面が撮れたわけです。後はベルリン市役所、長い伝統を持っている役所です。

これはミュンヘンのオクトーバーフェストという9月末から10月初めにかけての大きなお祭りです。もともとこれはビール・その他の収穫祭なのですが、60組ぐらいのいろいろなパレードがあります。軍楽隊等が通るのは当たり前ですが、それ以外に小さな子どもをこのような乳母車に入れてのパレードとか、このお父さんは赤ちゃんを抱っこしていますが、そのようなパレードです。日本のパレードはそれに比べて杓子定規です。鼓笛隊というと鼓笛ばかりです。(日本は)不真面目なことをしてはいけないパレードが多いです。中には、生きた牛とか羊がそのまま行進しているグループもありました。

これもドイツで、ハーナウだったと思います。8月の昼間、われわれが歩いていましたら、教会で式を終えた新郎と新婦が街中を歩いてきました。これから、おそらくはレストランへ行って会食するのだと思います。後に付き添っているのが親類縁者で、せいぜい15～16名です。つまり、日本の結婚式みたいに友達とか、会社の上司とか、そういう人たちをまったく呼ばないのです。親類縁者だけで行なうのです。友達を呼ぶとすれば、それは両人が家族同様に付き合っている仲良しだけを呼ぶ質素な形です。その結婚式の行進に出くわしました。われわれに出会って、立ち止まって、正面を向いた写真も撮りましたけれども、その笑顔で握手してくれます。ドイツは8月の結婚式が実に多いです。日本では8月の結婚式はほとんどありません。暑くてしょうがないからでしょうか。

これもドイツのハーメルンというところですよ。『ハーメルンの笛吹男』で有名な町の市役所です。この建物の端のほうには、午後1時と午後3時になりますと、笛吹男が出てきて、回転時計になってぐるぐる回って、それで子どもたちを誘惑して連れていくということがあるのですけれども、それを見終わって正面のほうに回ってきましたら、この二人が出てきました。この中で結婚したのです。レストランはありません。だから結婚の登録をして二人が出てきたのです。それに付き合っている家族だけです。服装が質素であること、それから、ドイツでは今でもそうだと思いますが、ここで結婚の登録をしますと、生涯を通じて日本の戸籍にあたるものはここに残るわけであって、住所がどこであれ関係ないというやり方になっているのです。

これもドイツで、南のガルミッシュパルテンキルヘンというスキーで有名なところですよ。私は仕事の都合上、夏休みしか出られなかったのが夏の場面が多くなります。さて、これは8月15日です。私は気がつかないのですが、8月15日は、カトリック教徒にとりましては、聖マリアが天に召された日、被昇天祭の日なのです。そうすると、会社も商店もお役所も全部休みになります。子どもたちは——ここちょっと薄いですが——燃やすとよく煙が出る薬草を持って、この教会に集まるわけです。

お母さんに連れられてきたこの女の子は、他のおばあさんに声をかけられて恥ずかしそうでしたが、後で教会の中でこれを燃やして、その煙を吸います。つまり魔除けで、たくさん吸うほど病氣から免れるという迷信が伝わっているその姿です。

これは家族ではないのですけれども、皆さんが学生だからと思って入れておきました。これはシュツトガルトに行ったときです。別の町に行こうと思って、われわれは中央駅のホームで待っていました。そうしたら、この連中、10人ぐらい仲間がいて、そろいのシャツを着て、大声でビールを飲みながら奇声を上げているのです。この連中だけ大騒ぎしていて、周りの人は知らんふりで誰も応じてくれないのです。この連中は落ち込んでいました。だから、かわいそうというわけではないのですが、私はこれも写真に撮っておくかと思って…近づくとどうされるかわかりませんから、これは隣のホームなのです。隣のホームから望遠レンズで撮ったのです。私がカメラを向けたことがわかった瞬間、この連中は喜んでくれました。俺たちに注目してくれる人がいると非常に喜んでくれて、前以上に奇声を上げ出して、このような格好をするようになったわけです。後でシャツの字を読んでみますと、翌日からミュンヘンで始まるオクトーバーフェストへ行くビアホールのアルバイトだと分かりました。ここは大学もありますし、大工場もあります。若者がいっぱいなので、ここからアルパイターが行くのです。その連中ではないかしらと思いました。

これは隣のオーストリアのザルツブルクです。モーツアルトの生まれた家のシュトライゼガッセの裏通りです。ここは夏でも音楽祭がたくさんありますから、夏でも混んでいるところです。私どもが何気なく歩いていました。これ実は教会の入り口の石段なのです。座って、このお母さんとおばあさんが赤ちゃんにご飯を食べさせていました。日本の人だったら、こういう容器に入れて食べ物を与えることはないと思うのですが、平気なのです。教会の下に座って、平気で赤ちゃんの離乳食にあたるものをあげておりました。赤ちゃんもご機嫌で応じておりました。このような場面に出くわすのです。

これはパリです。パリにはいくつもあるようですが、ピカソの美術館の一つです。われわれは見終わって、「さあ、どこへ行こうか」と出てきたところです。そうしたら、明らかに兄妹と思われる二人がこの鉄棒の柵を使って——これは運動用の鉄棒ではなくて柵なのですけれども——それをぐるぐる回る遊びをしていたわけです。この兄ちゃんもうまいのですが、妹さんも結構ぐるぐる、うまく回る事ができるのです。しかし、片手を離してくるくる回るのは、この兄さんの上手さにはかなわないのです。それで、妹のほうが一瞬自分の手を休めて、兄ちゃんの名人技を見つめている、そういう姿だったわけです。実は、パリのど真ん中でこのくらいの子が子どもだけで遊んでいる事は滅多にありません。たいてい親か年寄りが周りにそれとなくついて見えています。つまり、それだけ誘拐が多いのです。だから、ヨーロッパはどこの国でも、9つ以下の子が子どもだけで学校へ行ったり帰ったりすることはありません。デンマークもそうだったわけです。ところが、ここではその姿を探したのですが、見えませんでした。よほど近くに住む子なのだろうとわかりました。

ルーブル美術館の隣にチュールリー公園という大きな公園があります。そこに、おそらく直径10m以上の大プールがあります。そこで、日本にはないような珍しい遊びをしているのに気がつきました。女の子もいますが、男の子が主にするのです。父親を連れてきて、父親がお金を払って、貸しボート屋さんからヨットを借りるわけです。30分単位のようなのです。どうするのかと思ったら、坊やがこの長い棒で借りたヨットのここをつつつくわけです。そうすると、ボートは風をはらんで、池の中心までエンジンなしで自由に滑って行きます。行ったきりになってしまうのかなと思いましたが、真ん中に行きますと、必ず風向きを変えて、別の方向に戻ってくるのです。どこへ着くかはわかりません。こっちへ着くか、あっちに着くかわかりませんが、戻ってきたら、またこの坊やは走って行って、それをまた真ん中に突き出すのです。そういうことをやって楽しむ遊びがあることがわかりました。

その近くの高い塀に囲まれた普通のお屋敷に、ロダン美術館がありました。ロダンの彫刻を見たいものだと思ひまして、入口で切符を売ってくれるのを待っていました。時間がちょっと早いものですから、売り出すのを待っていたのです。そうしたら、カタカタと音が聞こえて、小さな人形の木馬を引っ張った3歳ぐらいの女の子がやってきたのです。この子はまさに威風堂々と脇目もふらず歩いて、われわれが切符を買うために並んでいた真ん中を突っ切ろうとしたのです。私どもは——日本人が多かったせいもありますが——この子に敬意を表しまして両脇を開けたのです。そうしたら、この子は黙々と真ん中を通して、このロダン美術館の中に入って行きました。後で気がつきましたら、お父さんが傘を持ってついてきて、一緒に朝の散歩をしているのだとわかりました。切符を買わなくていいのかなと思ひましたら、中に入って、見物なんかはしないでそのまますぐ引き返すようなので、切符は要らないのだろうと理解したわけです。

フランスの南に、ニースという観光都市があります。世界で三つに（数えられる）大きい春のカーニバルがあったときに行ったものです。カーニバルの行列はこの海岸線に沿って一直線に来て、回って帰るのですけれども、午後1時に始まるということなのですが、午後1時を過ぎてもさっぱりやって来ないので。出発地点からここまで2～3キロありますから、時間がかかることもあるのかもしれませんが、遅れたのでしょう。そうすると、もう待ちきれなくなったこのオヤジさんが立ち上がって…どうも話の様子から、これが娘で、これは娘の旦那さん、つまり婿さんなのです。娘の頭と婿さんの頭に、初めは本当の出し物が来たら撒こうと思っていた紙吹雪を吹きかけました。そうすると、この二人も憤慨しまして、持っていた紙吹雪をかけたのです。それでは勝負がつかないと判断したこのオヤジさんは、スプレーを持ち出しまして、このように二人に頭からふっかけたわけです。そうしたら、今度は婿さんのほうも負けないとばかりに用意してきたのをオヤジさんの頭にふりかけました。これは有料観客席なのですが、観客席も、パレードよりもこの三人の掛け合いのほうがおもしろいじゃないかと、みんなで拍手をしました。そうしたら、やっと向こうから行進の列が始まってきた。そういう情景です。

これはスペインのコスタ・デル・ソル（太陽海岸）の岸辺です。春休みに行きましたから、3月なんですけれども、でも、ほとんど一年中春のところのようで泳いでいる人もいます。このように大勢来るのですけれども、明らかに一人や二人ではないのです。数えてみると10人ぐらいいました。10人ぐらいが一族としてやってきて、それから、もちろん犬も連れて水泳にやってくるのです。スペインの人は大家族で行動するのが好きなのですけれども、その一つを見た感じでした。

これはコルドバだったのでしょうか。あるレストランで一緒になりました。これも一家でやってきたので、「ちょっと記念に写真を撮らせてください」と言いましたら、「どうぞ」と応じてくれました。なるべく普段の格好でいいと思ったので、ちゃんと並ぶ前に撮ったのです。こうしますとわかったのですが、（これが）明らかに母親です。そして、これが息子さんで、子どもなのでしょう。小さい女の子が年頃になると、こういう素敵な美人になるのですね。それから、さらに歳をとると、こういう…素敵か、素敵じゃないか、（ともかく）年配女性になるという、女性の三代の血のつながりがわかるような写真になっていたことに後で気がつきました。

これは、またお隣のイタリアです。これもカーニバルのベネチアに行きました。われわれは午前中から行ってちょっとくたびれたので、午後2時頃部屋へ行って休もうかとホテルへ戻ったのです。そうしたら、入口のホールで、このような一族が写真を撮りあっている場面にぶつかりました。様子やその他でわかってきたのですけれども、これは父親なのです。王様の扮装をしています。母親が王妃の扮装をしています。子どもが王子様の扮装をしています。上の男の子がもう一人いましたが、その子に写真を撮らせていました。交代で写真を撮っていたのです。要するに、一家でこの際王族に

なろうと…だいたいベネチアのカーニバルに来る人は、グループで何かになろうと企てて、このようなチーム編成をするわけです。そういうので王様と王妃、王子に扮する一族もあるのだとやっと気がつきました。みんなの写真撮影が終わった後で、この人たちは意気揚々とサンマルコ広場に出かけていく。その前の風景にぶつかったわけです。

これは広場から大きな太鼓橋が一本かかっています。アカデミア橋と言ったかと思いますが、そのアカデミア橋をわれわれは片方から上っていったのです。一番上に行くと、反対側から上がってくる人たちが見えました。上がってくる人の中にこのような一族が目立ちました。これも明らかに示し合わせた扮装です。赤いマントに黒い上下、それから角までみんな生やしています。しかも、この坊やはまだ2つになるかならない——1歳ぐらいだろうと思うのですが——おしゃぶりをしています。このおしゃぶりまでも見事に色や形を合わせています。ここまでちゃんと形をとって、ベネチアのカーニバルを歩いて来るのです。ベネチアに行きますと、このような仮装をしないで歩いていますと恥ずかしいぐらいになります。そういう雰囲気を出しています。これは何をもじっているのかと言いますと、私の推測ではこれはバイキングです。千年前、北欧の国からヨーロッパの国々を荒らし回って稼いでいたバイキングです。デンマーク、スウェーデンなどに多かったのです。その先祖を模しているのだらうと思います。ですから、たぶんそのような先祖を持った北欧の人たちではないでしょうか。ここはベネチアですが、世界各国から集まりますから、こういうことになります。

これはイタリアのベローナです。皆さんも行かれたことがあれば注目してほしいのですが、ここに有名なシェークスピアの大悲劇『ロミオとジュリエット』の原作ができたと言われていた家があります。彼女が外に乗り出して歌ったというテラスで、その下に銅像が建っています。ジュリエットの像が等身大で建っているわけです。いつの頃からか、今から100年近く前に、この像に触るときっといい恋人ができるという噂をだれかがつくったのです。それは世界中の噂に広がりました。ですから、ここへ来る人はみんな触るのですね。そこで右手と右の乳房がてかてかに光っています。他はこういう色なのですが、ここだけ光っているわけです。

さて、私が行きましたときも、イギリスから来た5人組の中年男の連中が——触り甲斐としては腕より乳房のほうがいいのでしょう——こちらを一生懸命触っていました。そして、友達の一人に写真を撮らせて、みんなで喜んでいる風景だったわけです。年頃から言ひまして、これから恋人をつくる年ではないと思うので、みんな家には立派な奥さんがいると思うのですが、それとは関係なく、とにかく素敵な恋人に恵まれたいという願いを込めて触っているイギリスのおじさんたち、というわけです。

これはローマ市立第二老人ホームです。ローマへ行きますと、老人問題の調査もあったので、われわれは名勝などには行きませんで、老人ホームを訪ねました。そこでいろいろなことがあったのですが、女の老人の人は——どこの国もそうですが——だいたい集まっておしゃべりしています。ところが、男は集まらないでバラバラになって、一人つくねんとしている姿、こういうのを多く見ます。このローマの老人ホームもそうでした。もちろん、この人たちは経済的に暮らしていけない事もありますし、家族と仲が悪くなった人もありますが、それは小さい理由です。一番大きな理由は何かと言いますと、実は今度結婚する息子や娘の家がない。その人たちに新居を提供するために、自宅を子どもに譲って老人ホームに入ったというわけです。300人入っているのですけれども、そのような理由で入った人が一番多いと教えられました。ローマは今でもそうだと思いますが、20年前のローマは住宅難だったのです。

これはトルコの首都イスタンブールです。イスタンブールはイスラム教が盛んなところで、こういう姿を見ることができます。これは街を歩いていて、日本語が達者なガイドの人が言ってくれたので

すけれども、9月の初めにこの子は6つになって新入学いたします。その前に教会へ行って、形式的ですが、お金がある人は割礼の儀式を受けるのです。それでも男の子にとっては退屈しごとだったと思うのです。儀式が終わって、それで終わりかと思ったら、今度はお母さんが有名なイスタンブールの土台を創った祖先の霊の礼拝まで連れて行きました。この子はいよいよ、ふくれっ面になっていたわけです。くたびれておもしろくないので、他のところを見回しましたら、他の男の子たちはみんなアイスクリームをなめています。お母さんにアイスを買ってくれとねだったわけです。ところが、お母さんは初め承知しませんでした。それで子どもはしゃがみ込んで泣き出してしまいました。遂に母親はしょうがなく折れまして、抱き上げて、アイスクリームのコーンのカップですけれども、その街頭に立った場面だったのです。

同じ日ですけれども、明らかに近くのモスクで結婚式を済ましたと思われる、真っ赤なベルトを付けて大きな指輪をはめた新婦が、新郎と二人でとてもうれしそうな格好で来ました。私がカメラを向けましたら、もっと違うポーズがいいのではないかとか、いろいろサービスをしてくれた二人でした。さて、この二人は結婚式の後、エルエンサーレという有名な祖先のお墓がこっちにありますから、お参りに行くところだとわかったわけです。どうしてそういうところに行くのでしょうか。通訳に聞きましたら、あそこは結婚という大事なことを始めるのに、幸先を祈るために行く人が多いということでした。トルコではちょうど同じ年——2002年です——日韓サッカーを日本と韓国で共同でやりましたね。そのときトルコは成績よく、実に3位になっているのです。準決勝で敗れたのですが、3位の成績をとりました。好成績を取めたのも、あそこにお墓参りをしたからだ、トルコの人たちは信じて疑わないようです。

これはブルーモスクという有名なイスタンブールの大寺院の一つです。その中を見て、外へ回りました。これは裏側です。子どもたちはそういう由緒ある大寺院に関係なく、4人で遊んでいました。放水栓を見つけて水かけっこをしていたわけです。一番負けた姉さんがたまらず悲鳴を上げている場面をキャッチすることができました。

これはアメリカです。ペンシルベニア州なのですけれども、300年昔の……この人たちの祖先は、スイスとドイツの間に住んでいてひどい迫害を受けました。そして、聖書中心主義をとってカソリックを否定し、それから新しい新教も否定して、アーミッシュという人の言うことに従って極端な聖書中心主義をとったのです。それを守って、今でもアメリカのど真ん中にいながら電気は使いません、ガスも引きません、それから水道も引かず、井戸でやっております。それから、一番の輸送手段である自動車を絶対に持とうとしません。300年前のしきたりを守っているわけです。どうしてそういう不便なことをするかと言うと、そういう通俗的なことをすると人間は墮落して、永遠の生命、エターナルライフを得られなくなるからだということで、昔ながらの生き方をそのままやっている人々が、今でもアメリカに7万～10万人ぐらいいるのです。その人たちが住んでいるところを見に行こうと思ったのです。そうしたら、その途中でこの人たちが馬車で帰ってくるのに出会ったわけです。私どもも知っていたのですけれども、これは自動車の運ちゃんの指図なのです。運転手さんが、「この人たちは写真を拒否します」と断るのです。それは聖書の中に「汝の像を刻むなかれ」という教えがありますから。写真を撮ってはいけない、残してはいけないということがあって、われわれがうっかり向けますと、全部顔を背けられます。「現地では撮れないよ、撮るのならここで撮りよ」と、わざとやり過ぎようふりをして、自動車をここで止めておいてくれて、前を通る馬車を車の中から撮ったので、こういうのが写っているわけです。この子は15～16歳だと思のですけれども、中学を出た後、おそらく農家を継ぐことは間違いないです。都会へ出ることは1～2割を除いてありません。

これはニューヨークの北1時間ぐらいのところにある大きなスーパーか、小さなデパートでした。

そこで本を探していましたが、日本には無い乳母車がありました。明らかに双子がいるわけです。これは両親だと思おうのですが、雑誌を読みあさって二人のことは知らんふりで、双子はまた悠々とミルクを飲んでいて、そのような様子をキャッチしました。

これはニューヨークの下町です。歩いていたら、普通ではない格好で歩いている、近くの小さい教会で結婚式を挙げたばかりと思われる二人連れがいるのです。これに従っている人が10人ぐらいついています。どこかへこのまま行くのだろうと思いましたが、下町を行ったり来たりしているのです。ちょっと疲れてくると、近くのお店に寄ってコーヒー一杯飲んで、また歩き出すということをやっていることに気がつきました。これはそういう新婚旅行かなと思ったのですが、顔をよく見るとけっして若くはありませんから、再婚と思われます。参考までに調べますと、実はアメリカは離婚大国です。アメリカとロシアが世界一の離婚率なのですが、アメリカでは再婚も非常に多いのです。ですから、アメリカの中で夫婦として暮らしている人の割合はいつも変わらないのです。けっして減らないのです。再婚が多くあるわけです。

これはハワイです。子どもが3人いるのですが、この夫婦は最後に生まれたこの子を非常に可愛がっているのです。奥さんは日系の人です。この夫は画家です。奥さんも外で絵に即した仕事をしたいくたしょうがないのです。ところが、旦那がどうしても（オーケーして）くれないわけです。それはやはり、小さい子を預けたり委託するのは反対だと夫が言い切って、仕事に出ることを認めてくれないのです。非常に残念だと言っていました。ハワイでもやっぱり誘拐、殺人等が非常にたくさんあるそうです。

ハワイへ行った人はご記憶だと思いますが、観光トロリーバスが走っています。われわれもそれに乗りました。そうしたら、私どもが座った真ん前にこの二人がいたのです。眼鏡も上着もどこからどこまでも揃いのものです。ヘアスタイルだってそっくりではありませんか。まったく似た者です。発車するまでの間に話してみました。「ツイン（双子）ですか？」と聞いたら、「もちろん」とのことです。アイオワ州から来ていて、「アメリカでも二人近くに住んでいるの」というわけです。そういうことを聞いたものですから――

これは今から15年ぐらい前のことなのですが――「日本ではシルバーとゴールドという名前のおばあさんの双子の姉妹の評判が高いんですよ」と言いました。きんさん、ぎんさんのことです。そうしたら、この二人も喜んで、「私たちもそのように100を越える年まで元気でいたいわ」と言ってくれました。

これは中国の北京第一小学校です。一番名門で競争率がとても高い学校です。そこへ入りましたが、話はできませんでした。「ニーハオ」とは言ってくれたのですが、これは左右が逆で申し訳ないのですけれども、字はわれわれもよく読むことができました。「祖国を愛し、人民を愛し、科学を愛し、労働を愛し、社会主義を愛せよ」という言葉が黒板に板書されていました。

こちらのほうがより家族に近いのですが、これは大地震やなんかで両親を失った子どもばかりです。それを集めている「SOS子どもの村」というのが中国に4ヶ所あるのです。発足はオーストリーなのですけれども、孤児救済で7～8人集まったところで1軒の家に住みます。そこに一人のお母さんがつきます。それが、8軒から10軒集まったところで、男が一人つきます。それが父親役をやります。そういう暮らしをしている人たちです。ここが薄くなっていますが、「いっさいを孤児のために」という標語が貼り出されていました。

これは今日出した中でも非常に珍しい写真の一つではないかと思えます。実は離婚に来た男女です。

北京のど真ん中です。婚姻登記所というのがありまして、その中の一室に離婚を登記するところもあるわけです。離婚するのは日本みたいに紙一枚出せばというわけにいかないのです。係官の前で「子どもはどういうふうにするのか」、「財産はどう分けるのか?」というようなことを書いて説明して、納得を得なければいけません。離婚原因を覗いてみましたら、「感情破裂」と書いてありました。「感情破裂」というのは日本でもよくわかる表現です。この男は教員、この人は保母さんだと職業もわかりました。そういうことをよく確認した上で、係官が離婚証を発行してくれて、ここで初めて離婚になるわけです。日本の90%は協議離婚で紙一枚で離婚ができます。それに比べると、中国のほうは、よほど慎重です。

これもちょっとおもしろいと思って（撮りました）。これは明の十三陵へ行ったときです。ここで20元払うと、女の人に花嫁衣装を着せて、冠を被せて、きれいな箱に乗せて、男の子4人が担ぐ車で城内を一周してくれます。賑やかな踊りなのですが、そのときに歌が流れます。お茶の水に来ていた留学生が案内してくれたのですが、何の歌か聞いてみましたら、「中国の人ならみんな知っている歌です」と言いました。「どんな歌か教えてくれ」と言いましたら、「久しぶりに実家へ帰るお嫁さん」というわけです。「左手にニワトリ、右手にアヒルを提げての千鳥足」、非常に気分よく帰るのです。ところが、「肝心の子どもを忘れて来てしまい、実家に行っても親に会わせる顔がない」と、そのような歌を歌いながら一周するということです。つまり、中国では実家へ帰るのは、非常に大変で、非常にうれしいことだったことを表わしている場面でもあるわけです。

これは天津です。双子です。「一人っ子時代に大変ですね」と聞きましたら、「双子は公認されるから、双子はうれしいですよ」と、後にいた父親はそう言ってくれました。

これは韓国の保育園に呼ばれたときです。これは私の家内なのですが、作っていった熊の指人形でちょっとした寸劇を韓国語でやりました。「チョ・ウンキル・トポトポ」…これは日本語では「一本道をテクテク」という言葉です。これは一本道のつもりです。それを熊がテクテク行くわけです。そういうふうに見えたての韓国語でやったのですが、韓国の5歳児は非常によく反応してくれました。小さい教室です。

これは普通の農村です。まだ病気がりというので、奥さんが家にいたのですが、「うちは9人なのよ」と言っていました。（人数が）いっぱいということと、それから珍しいことは、樽がありまして、醤油、味噌などは今でも陶の鉢で作っていることを教えてくれました。

時間もありませんので、これで（終わります）。急ぎましたが、このように、なるべく普段着の表情をとらえてみようと思いました。平和のときには、やはり家族の顔というのはどこの国の人もいい顔をしていまして、戦時中の写真も大事ですけれども、それとは違いがあることも知っていただきたいと思って、皆さんにご紹介したわけです。以上でございます。

司会 湯沢先生、どうもありがとうございました。皆さん、長時間ありがとうございました。せっかくの機会なので、何かご質問があればお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。どなたかございますか。

それでは私から一つだけ。湯沢先生は世界をいろいろ回られて、日本の家族と、例えばデンマークをとりまして、デンマークの家族と一番違うと思われたところはどこでしょうか。特徴的なところを一つ二つ簡単にお問い合わせいたします。

湯沢 いろんなことがあるのですが…時間が無いので短くいたします。例えばヨーロッパ、ことにデンマ

ークでは親の同居はまったくありません。99%ないと言っていいです。ですから、小さい子を残して夫婦だけで出るとは基本的にできなくなっているという問題がプラスにもマイナスにもいっぱいあります。それから今、離婚する夫婦の割合というのはヨーロッパも日本もほとんど同じぐらいになっています。

それから、言い落としてしまったけれども、例えばデンマークなどもそうですが、18歳になりますと、進学、就職に関係なく、全部親元を離れます。一人で生きなければいけないのです。それで暮らせるかという、国が生活補助金を6万円か7万円出します。しかし、足りません。11万円なくてはいけません。あとは自分の働きです。いろいろなことがあります。また、大学でも高校からストレートに入ることは歓迎しません。つまり社会勉強が必要なのです。そういうことを経ないと大学も入れてもらえないようになっていたりとか、やはり自立の気持ちが日本は足りないように思うといったことですね。その他いろいろありますけれども。

こちらの研究費をいただいて行なったデンマーク調査の結果は、朝日選書で『少子化をのりこえたデンマーク』という本にまとめてありますので、デンマークに関心がある方はご覧いただきたいと思います。

今日ご紹介したのは『街角の家族たち』という写真集にしまして、10冊だけこちらにお送りしております。これから私が勝手に——テレビの番組みたいですが——10人当たった方にはこれを差し上げますので、前に取りに来ていただきたいと思います。35番の方、24番の方、40番の方、15番の方、72番の方、68番の方、84番の方、94番の方、41番の方。このようにたくさんいらっしゃると思わなかったので、10冊しか用意しなかったのですが、実は家には余るほどあるので、あと希望の方があつたら長谷川先生の研究室に送っておきますので、申し出をしてくだされば差し上げます。あと数十部を送っておきますから、申し出てください。以上です。

司会　　本日は大変ありがとうございました。　—了—